

文化財デジタル画像形成に関する調査研究 (①企05-12-2/5)

目 的

脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。そこで文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。本調査研究では、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法、及び、その応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究することを目的とする。

成 果

1. 文化財の調査・撮影など

- (1) 東京国立近代美術館所蔵巖光作「馬」(近赤外線撮影(表面)、透過近赤外線撮影、カラー撮影(12.11.14))
- (2) 平等院所蔵「日想観」(近赤外線撮影、蛍光撮影、カラー撮影(13.1.7-10))

この他所内外からの依頼を受け、様々な文化財の光学調査を実施した。

2. 他機関との共同調査

- (1) 宮内庁三の丸尚蔵館「春日権現験記絵巻」第4巻・第15巻(可視光線マルチショット撮影・赤外線撮影・蛍光撮影による調査(12.12.3-6))
- (2) 奈良国立博物館(當麻寺所蔵「當麻根本曼荼羅」の可視光線6ショット分割撮影・部分拡大撮影、赤外線分割撮影、蛍光写真分割撮影による調査(12.12.17-21))

3. 成果の公表

平成23年度に実施した調査研究成果の一部である兵庫県加古川市鶴林寺太子堂「内陣莊嚴画」の赤外線写真21点について兵庫県立歴史博物館で開催された特別展「鶴林寺太子堂～聖徳太子と御法の花のみほとけ～」(会期12.4.14-6.3)及び同図録中で、また佛光寺所蔵「善信聖人親鸞伝絵」画像について下記論文で公表した。

4. 研究及び開発

戦前から昭和40年代頃まで事務文書複製などに盛んに使用されたいわゆる青焼コピーは、時間の経過と共に退色しその記載内容の判読が不能となるが、こうした文書類に対し撮影による簡便な復元手法の研究及び開発を行い、良好な復元結果を得た。

論文

- ・津田徹英「佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の製作時期をめぐって」『美術研究』408 pp.1-94 13.1

発表

- ・太田彩、小林達朗、城野誠治「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵春日権現験記絵共同調査の中間報告」企画情報部研究会 12.9.25

研究組織

- 小林公治、田中淳、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、二神葉子、綿田稔、小林達朗、皿井舞、城野誠治、鳥光美佳子(以上、企画情報部)、江村知子(文化遺産国際協力センター)、早川泰弘(保存修復科学センター)